

『臨牀透析』の事始めと、 事をどう収めるべきか？

鈴木 正司*

古い手帳を捲ると、1984年8月30日の欄に“東京・山の上ホテル”とあり、それは月刊誌『臨牀透析』の創刊の企画会議を意味していた。前田貞亮先生から召集を受けて黒川 清・酒井 糾・中川成之輔の大御所先生と、宇多希（看護）・川崎忠行（工学）・安西志保子（栄養）・赤間立枝（心理/社会）の先達に加え、左足首痛を抱えておおげさにもギプスでぐるぐる巻きの足で跛行する、田舎の「青年医師」の私が顔を揃えたのは午後6時であった。

話は外れるが、私が卒業した昭和43年（1968年）は全国的な大学紛争の最中にあり、全国の医学部では「インターン反対闘争」が盛り上がっていた。クラスでは「大学病院（研修）ボイコット」を掲げ、私は大船渡（外科）と秋田（内科）で2年間の「自主研修」を行った。その後は腎臓内科・透析治療の研鑽を求め、信楽園病院の平澤由平先生の下に草鞋を脱ぐ身となり13年が経過していた。その頃の病院職員間では野球部（1軍と2軍）があり、そのほか透析室にもチーム（3軍）があった。その時の私は2軍の首位打者（年間打率2割8分）・3塁手で、数日前の「市民早起き野球」で足首を痛めつつ……この会議に参加したのであった。

話を戻すと、この会議ではすでに9年先行していた月刊誌『腎と透析』を鑑として、『臨牀透析』誌のコンセプトを巡る熱い討論の結果……腎臓病学の基礎に立ち、看護・

* 信楽園病院附属有明診療所

工学・栄養・心理・社会的対応などの凡ゆる面^{あら}に深く関わる雑誌の姿が浮かび上がった。そこで毎号の特集に加えて、創刊号から各種の連載……腎臓病学の基礎、骨病変、画像診断、心電図の診かた、検査値の読みかた、新しい透析技術、栄養管理、食品情報、Original Paper, Psycho-Social Studyなどがスタートした。

「青年医師」は“透析患者の画像診断”を3巻12号まで担当したが、それはすぐに次の締め切りが来る難行苦行であった。42年前の社会を想起すれば……パソコンの普及やEメールは無く、ワープロは実用に耐えず、手書きの原稿用紙を鋏と糊で継ぎ^つ接ぎ^はし、速達便かFAXで送るのみであった。病院スキー旅行に参加しても、スキーはやらずに炬燵で締め切り原稿作成をする状態であった。

斯^{かく}して42年経過した現在でも、あの時のコンセプトは変わること無く継続された……と自負できる。しかし、草創期を担った前田、酒井、中川の御三方はすでに鬼籍に入り、彼らに本誌の42巻での終了をどう伝えるべきか……しばし考える時間が欲しい所である。